

9月下旬播種で年内の出穂が早く、多収なエンバク夏播き用極早生品種「九州15号」の育成

○桂真昭・我有満・松浦正宏¹⁾・長谷健²⁾・上山泰史³⁾・松岡秀道・後藤和美⁴⁾・小橋健⁵⁾・西本淳⁶⁾・清水一⁶⁾
 (九州沖縄農研・¹⁾元九州農試・²⁾鹿児島農総セ大隅・³⁾東北農研・⁴⁾長野畜試・⁵⁾山口農試・⁶⁾カネコ種苗(株))

【目的】

エンバク極早生品種を用いる夏播き栽培は年内に出穂させて収穫する作付けで、その播種適期は9月上旬とされている。しかし、播種作業は天候や各種作業の影響で9月下旬になることも多く、既存品種では年内の出穂が不安定で、出穂に至らない場合があり、播種が遅れた場合でもより安定して出穂し、収量性が確保できる品種が求められている。そこで、既存品種より出穂が早く、従来の播種期から10日程度播種が遅れても年内の出穂程度が高い多収品種の育成を目指し、「九州15号」を育成したので報告する。なお、「九州15号」の育成に関して、ご協力いただいた関係機関の各位に深謝いたします。

【育成経過】

「九州15号」は、1994年に耐倒伏性や冠さび病抵抗性に優れるCoker 820(アメリカの品種)を種子親、夏播き栽培で最も早く出穂する「九州3号」を花粉親として交配した。F₂世代以降で出穂性、冠さび病抵抗性、発芽性、耐倒伏性、収量性を評価・選抜し、F₇世代で都城試験地における評価・選抜を経て、2002年に選抜した。山口県農業試験場お

よび宮崎県畜産試験場で系統適応性検定試験等を実施し、2007年2月に育成を完了した。

【特性の概要】

表1に示したように、「九州15号」の出穂は、9月前半に播種した標準播きで、既存品種より出穂が5日以上早く、9月下旬に播種した場合は既存品種との差が拡大し、収穫時の出穂程度も既存品種より明らかに高い。倒伏程度は既存品種より小さく、耐倒伏性に優れる。収量性に関しては、9月前半に播種した標準播きでは「はえいぶき」と同程度であるが、9月下旬播種では既存品種より多収である。耐病性では、重要病害である冠さび病に対する抵抗性が「極強」であり、各種病害には既存品種と同程度の抵抗性を示す。品質に関しては、推定TDN含量は「はえいぶき」よりやや低いが、粗タンパク含有率は「はえいぶき」と同程度である。

このように「九州15号」は、標準播きでは既存品種と同程度の収量性を示し、播種が遅れても既存品種より収量性が確保され、より安定した自給飼料生産に貢献できると考えられる。

表1. エンバク「九州15号」の夏播き栽培における生育特性

	九州15号	はえいぶき	スーパーハヤテ隼	たちいぶき	備考
標準播きにおける出穂まで日数 ¹⁾	45	50	53	62	3場所・3年間の平均値
9月下旬播種における出穂まで日数 ¹⁾	52	57	65 ⁷⁾	65 ⁸⁾	九州農研4回の平均値
9月下旬播種における収穫時の出穂程度 ²⁾	6.8	5.9	3.8	2.2	九州農研4回の平均値
倒伏程度 ³⁾	3.0	4.4	4.6	3.6	3場所・3年間の平均値
標準播きにおける乾物収量(kg/a) ⁴⁾	64.4 (99)	65.1 (100)	68.3 (105)	60.9 (94)	3場所・3年間の平均値
9月下旬播種における乾物収量(kg/a) ⁴⁾	55.4 (112)	49.6 (100)	49.4 (100)	42.3 (85)	九州農研4回の平均値
穂重割合(%)	26.2	17.9	20.1	12.6	3場所・3年間の平均値
冠さび病抵抗性	極強	強	中	極強	特性検定試験での判定
葉枯れ病罹病程度 ⁵⁾	1.6	2.7	1.8	2.9	2場所4回の平均値
黒斑病罹病程度 ⁵⁾	1.1	1.5	1.1	2.2	2場所3回の平均値
かさ枯れ病罹病程度 ⁵⁾	1.8	1.8	1.1	2.9	宮崎畜試2回の平均値
すじ枯れ細菌病罹病程度 ⁵⁾	1.5	1.0	2.5	1.0	宮崎畜試
推定TDN含量 ⁶⁾ (%)	55.9	56.8	59.0	58.5	九州農研2004,2005年の標準播きサンプル
粗タンパク含有率(%)	10.1	10.1	10.4	12.1	九州農研2004,2005年の標準播きサンプル

注 1)出穂まで日数は播種から出穂始め日までの日数。2)1:出穂無-9:極多。3)1:無-9:甚。4)括弧内は「はえいぶき」比。5)1:無-微-9:甚。6)出口ら(1997)の推定式(TDN=-5.45+0.89*(OCC+Oa)+0.45*OCW)で計算した。7)出穂始めまで未到達が1回。8)出穂始めまで未到達が3回。